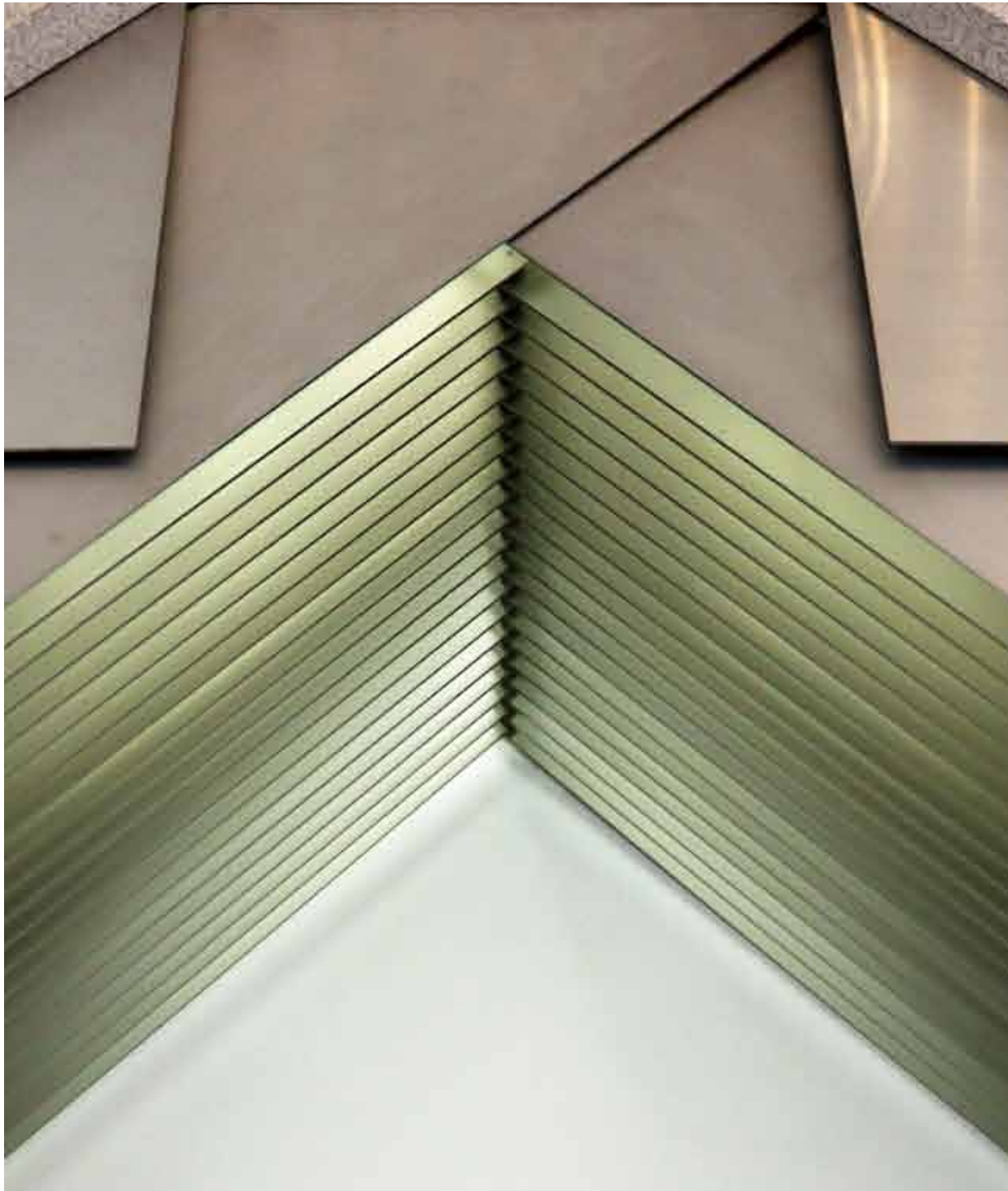


# 125

2019 SUMMER

## 美術館NEWS



### 「美術館の紹介」Vol. 25

「抽象と細密」は、この建築の重要な構成要素なのだという。館内各所にみられるさまざまな触感の花崗岩、そして石と異素材の並置が「細密」を作り出すならば、「抽象」を建築にもたらすのは、幾何学的な形状と鈍い光が強い存在感を放つ金属にほかならない。



岡山県立美術館  
OKAYAMA PREFECTURAL MUSEUM OF ART

# 1875年の上海土産 一南画家・衣笠豪谷と水蜜桃

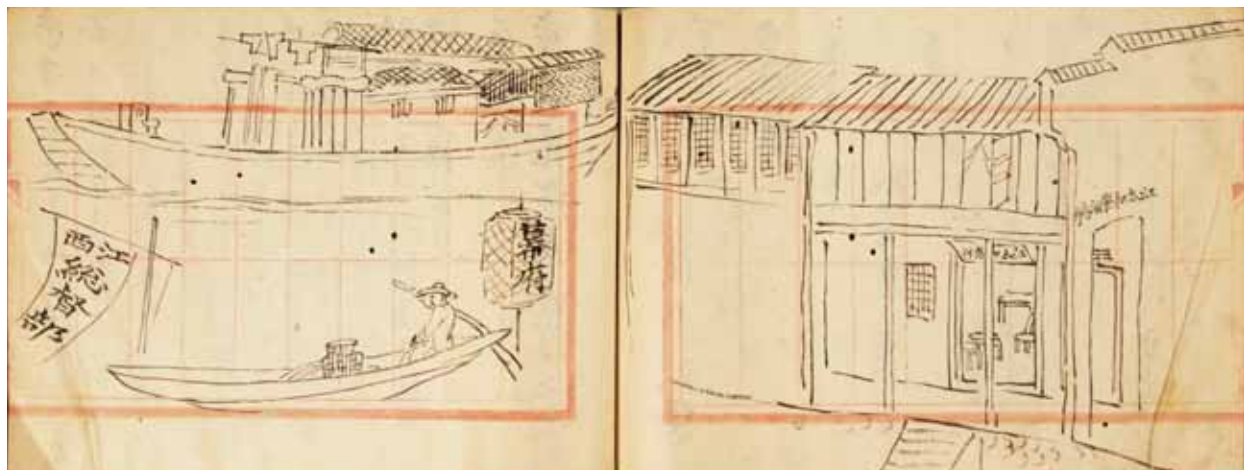
八田 真理子(学芸員)

明治前期という時代の奔流のなか、南画家として筆を執り、官僚としても中央で活躍した倉敷生まれの衣笠豪谷(1850-97)の名を郷土以外で知る者は少ない。岡山県下でも忘れ去られて久しいかもしれない。この要因には、豪谷の弟子の少なさ、明治期の南画そのものに積極的な評価がなされなかったことなどがある。そのためにもはや知られざる画家となっていた豪谷であるが、このたび当館では関係資料の寄贈を受け、企画展示の開催と大正4(1915)年の『豪谷画庵遺墨集』以来となる図録の作成を決めた。調査を進めるなかで写生図、歴史画、風俗画といった南画以外の作品と出会うことも多く、豪谷自身の関心、そして人々が豪谷に期待したものが一様ではないことを痛切に感じている。そして同時に、高い画技をもちながらも銜<sup>てら</sup>い<sup>ない</sup>画面を目にするたび、今一度評価されるべき画家であるとの確信を強めている。

展示は画家としての豪谷を追うものであるが、その生涯を語るうえで、殖産興業に寄与した業績の数々は到底見過ごせるものではない。それらは豪谷の画名を高めたはずであるし、何より、博覧会をおこなう側の官僚でありながら出品作家でもあったという事実は、豪谷を純なる芸術家では済まなかったことであろう。この小文では、画家を志していた豪谷を官僚の道へと導いた清国留学について述べるとともに、その時日本へ持ち帰ってきた土産を挙げて、豪谷の紹介に代えたい。

幼時より漢学に親しみ、谷文晁の弟子で倉敷に移住した石川晃山から詩画の手ほどきを受けていた豪谷であったが、渡清を決意したのは19歳頃からの師である中西耕石の勧めによるという。中国文人画に描かれた風景や伝統的な画題の舞台を実感すること—これらは江戸時代の南画家たちには叶わぬ夢であった—、そして画の研鑽や文物の収集を目的に、明治7(1874)年5月、25歳で長崎から上海に渡航する。こうして始まった留学は1年8か月続いたが、それにしても多くの名跡を巡っている。まず、豪谷は到着した月にすぐさま蘇州へと向かった。舟に揺られて山々を眺めては董源の画のようだと感想を漏らしており、旅の興奮を伝えている。それから文人庭園を散策し、古刹寒山寺を拝観している。そして紹興近郊の蘭亭では王羲之に思いを馳せた。その後移動した杭州では西湖を遊覧したという。これら詳細な行程は、豪谷の清国滞在記『乗楫日記』から判明するものである。そのうちの1冊は豪谷が携帯していた一次的な原本と思われ<sup>\*1</sup>、出来事のほか支出金額、読み付きの中国語の覚書とともに、風景スケッチが残されている。その殆どが伝統的な描法に則っているが、下図のように家屋のつくりや江西総督部の幟を描き留めるなど、豪谷の目は絵画的な景色に感動するとともに、絵には描き込まれてこなかったディテールを熱心に捉えていることがわかる。この江南旅行から戻った二か月後には再び旅に出ており、雪舟も描いた鎮江の金山寺を見て、長江を遡って武昌に遊び、李白の詩で知られる黄鶴楼に登るなど、じっとしてはいられなかったらしい。

清国滞在中の明治8(1875)年6月、勸農局員の武田昌次と岡毅に面会したことが、豪谷のその後を左右する出来事となった。この時、武田と岡は大久保利通の命により、大陸産業の調査を目的として来航したばかり



衣笠豪谷『乗楫日記』より 明治7(1874)年 岡山県立美術館蔵

りであった。彼らは殖産興業についての意見を交わし、豪谷の才覚を見出すと、調査団に通訳として加わるよう要請したのである。それから豪谷は一行とともに天津、北京へと向かった。8月には長江伝いに漢口を通過して洞庭湖へ行き、岳陽楼へ登っている。寧波では天童山などの名刹を回り、豪谷にとっては再びの杭州・蘇州見学もしている。このように列記するとまるで観光ばかりしていたかのように聞こえるが、武田らは抜かりなく各地の物産を持ち帰っている\*2。それでも豪谷にとっては、身の安全が保障された、この上ない条件での名勝巡りであったろう。このように幸運な武田らとの邂逅は、いつから、どの程度期待されたものであったのか。豪谷の当初の渡清予定期間や、当時の交友関係については精査の必要がある。ともあれ、画囊を肥やすための留学によって、豪谷の官僚としての道が拓かれたことは間違いない。一行と同時に帰国した豪谷は推挙され、勸農局員として働き始めたのである。産業調査に同行した折に得た信頼とともに、図の画ける技能なども含めて評価されたのではないかな。

さて、この帰国時に豪谷らが持ち帰ったものには、緬羊や各種花木、蔬菜の苗木、人工孵卵法など、後に発展する産業の種となるものが多くあった。岡山においては孵卵法の普及ばかり語られているが、それだけではないのである。さらに、豪谷がただその場に居合わせたのではないことは、北京視察の一行から一時的に離れて向かった長城で拾った壁瓦を材料として、耐火煉瓦窯工法を研究したというエピソードからも判明する。この耐火煉瓦はやがて備前市で発展を遂げるが、豪谷の関わりもあろうか。尤も、岡山にとってとりわけ重要な功績と思われるのは、天津種および上海種の水蜜桃の苗木を持ち帰ったことであろう。それまで日本に自生していた桃は食用に好まれるものではなかった。ところがこの清国品種は大きく丸く、とびきり甘い。豪谷も日記に感慨をもってその味を書き記している。この苗木が東京・三田育種場を経て、岡山・天瀬の勸業試験場などに配布され、瞬く間に水蜜桃栽培が広まっていったのである。明治24、5年頃には既に、岡山は桃の名産地としての評判を高めていた\*3。

水蜜桃が岡山に根付く約16年間は、豪谷が官僚としても画家としても名声を高めていく時期とほぼ重なる。明治25(1892)年に官職を辞してからの豪谷は東京・牛込の自宅で画業に専念しているが、両親の死や自身の罹病が重なって倉敷の旧宅で過ごすことが徐々に多くなった。不老長生の仙薬の伝説を思いながら、瑞々しい水蜜桃をかじったこともあったろう。それでも豪谷は、自ら輸入に立ち会った水蜜桃が地元の景色に溶け込んでいくさまを、目を細めて眺めていたに違いない。



豪谷29歳時、官僚としてのキャリアをスタートさせた頃。岡山県立美術館蔵



清水白桃  
(写真提供：農業研究所果樹研究室)  
岡山を代表する品種であるが、ルーツは豪谷らの持ち帰った上海水蜜桃系である。

\*1:  
当館に所蔵される残り2冊は豪谷が浄写した二次的なものである。また、東洋文庫にはそれらをさらに清書したと考えられる6冊本が蔵されている。

\*2:  
武田昌次『清国産業調査復命書』明治8(1875)年 早稲田大学図書館蔵

\*3:  
岡長平『お国自慢叢書第二編 桃の恩人たち』昭和19(1944)年



衣笠豪谷《備中倉子城図》(部分) 明治25(1892)年 倉敷市立美術館蔵

# 緑もゆる丘

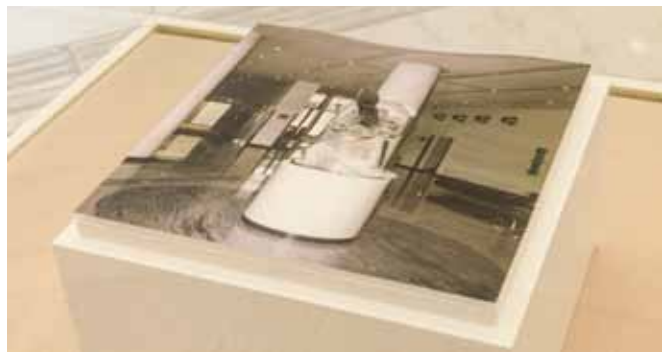
古川 文子(学芸員)

五月の風に誘われて、緑ゆたかな二つの美術館に、岡山県新進美術家育成「I氏賞」受賞者の展覧会を訪ねてきました。

連休明けの青空がまぶしい朝、比治山公園の坂道を上ると、新緑の林を抜けた階上に、広島市現代美術館の開館30周年記念特別展「美術館の七燈」のタイトルバナーが現れます。「観客・建築・場所・保存・歴史・逸脱・あいだ」の7つのキーワードによる展示構成のうち、歴史にあたる第5章「積み重ね」の会場で、入江早耶さん(第7回奨励賞受賞者)にお話を伺いました。かつてここに存在した物の写真を消し取った消しゴムのかすを素材に、失われた姿を精巧な「亡霊」像として蘇らせた《美術館の七霊》を出品するとともに、鹿田義彦氏とのデザイン・ユニット「又又」として、本章のアート・ディレクションを手がけたと言います。地質調査のサンプルや設計図・記録写真等でたどる「開館」までの道のりと、30年分のポスターを一望する「展覧」の壁面を、世相を伝える品々で「補遺」する構成からは、美術館が駆け抜けてきた時代の息吹が伝わってきます。作品と企画双方に、物事のかたちとその変転を辛抱強く見つめ、本質を探ろうとする真摯なまなざしが感じられました。

続いて、第3回奨励賞受賞者の小野耕石さんから、軽井沢のセゾン現代美術館で、独自の版表現で取り組んできた作品群を一堂に展示するとのお知らせがありました。企画展「The ENGINE 遊動される脳ミソ」は、鮮烈な絵画を描く門田光雅氏との二人展としての緊張感はもとより、色や光をテーマとする館藏品とのコラボレーションにも譲らぬ気迫を感じました。まず、エントランスから続く長い廊下には、動物の頭蓋骨にインクの柱を移植した《Inducer》シリーズ7点が並び、各々の制作Noと同じ数字をモチーフとするジャスパー・ジョーンズ《カラー・ナンバー》と鮮やかな色彩の共演を果たしています。その奥の一室には、刷り重ねたインク層が視覚の揺らめきを生み出す《波絵》シリーズが、過去最大規模で床面に展開します。帆布を支持体とする最新作《Loopprint》とアンディ・ウォーホル《ポートフォリオ 毛沢東》(いずれも10点組)の間を往き来しつつ、窓外に広がる深緑の庭園を臨むことのできるスロープ状の展示空間は、まさに眼福でした。

両館を通じて感銘を受けたのが、「七燈」展のキーワードでもある「建築」との共鳴です。設計者の思想が凝縮した空間と収蔵の名品、その場に挑む現代作家による三つ巴のせめぎ合いは、展覧会の生命となり、見る者にはたらきかけてきます。梅雨の晴れ間に木々の緑も輝きをます季節、内なる「ENGINE」を発動させる会場に足を運んでみてはいかがでしょうか。



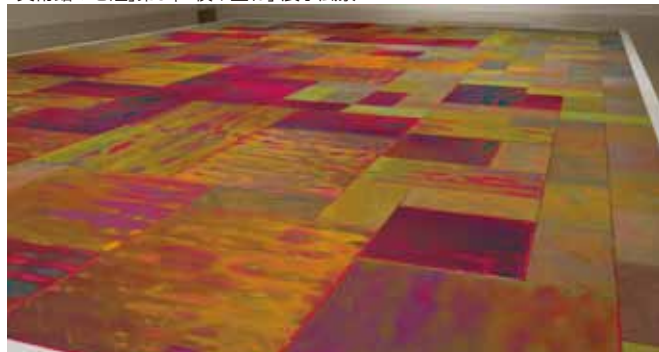
入江早耶《美術館の七霊》(7点のうち ヘンリー・ムーアのアトムピース) 2019年



「美術館の七燈」第5章「積み重ね」展示風景



「The ENGINE 遊動される脳ミソ」展示風景(撮影:加藤健 同右)



小野耕石《波絵》+《古き頃、月は水面の色を変えた》(部分) 2008-19年

【展覧会情報】「The ENGINE 遊動される脳ミソ 小野耕石×門田光雅」(会場:セゾン現代美術館 会期:2019年4月20日～9月1日)

※「美術館の七燈」(会場:広島市現代美術館)は会期を終了しましたが、「瀬戸内国際芸術祭2019」の小豆島・二十四の瞳映画村にて

入江早耶《漁師の夢》を展示中です。(夏会期:2019年7月19日～8月25日/秋会期:9月28日～11月4日)

# 晴眼者が触図に触る意味

「暗闇ワークショップ／触ってみて、みて！—触察アートゲームにチャレンジ—」の実践から

岡本 裕子(主任学芸員)



「暗闇の世界へようこそ」(24日13-の部)

当館では、晴眼者と視覚障害者が共に作品を楽しむ方法の一つとして「鑑賞ツールとしての触る絵画(触図)」を制作している\*1。触図に触ることが苦手な視覚障害者や通常触図を必要としない晴眼者が、触図そのものを楽しく触ってその面白さに自ら気づくことを目的に、《鑑賞ツールとしての触る絵画／アートゲーム編》の制作とそれを活用した「暗闇ワークショップ／触ってみて、みて！」を企画した\*2。ワークショップの実践から「あえて晴眼者が触図に触る意味」を考えてみたいと思う。

「触る絵画／アートゲーム編」として制作したツールは、触図パターン(凸と面)、パターンを使って構成された画面、所蔵作品2点\*3を使った触る絵画である。ワークショップは、視覚障害の有無に関わらずすべての人が視覚を使うことができない暗闇の中で行った。暗闇散歩で徐々に暗闇に慣れた後、「触る絵画／アートゲーム編」を使った3種類のアートゲームを行い、最後にお楽しみの時間を設けてお茶とお菓子を食べながらワークショップの振り返りをするという所要時間90分の暗闇プログラム。障害の有無に関わらず、小学生以上一般を対象として5回実施(各回の定員は6人)。内2回は高校生以上一般を対象とした「大人の時間」を設けた。触察のファシリテーターは、暗闇環境を得意としている全盲の広瀬さんと藤下さん。所蔵作品情報を言葉で提供する場面では油彩画担当学芸員が登場。また、障害者の参加や暗闇環境の安全性をサポートするスタッフ\*4の協力も得た。

参加者は小学生10人、中学生1人、高校生2人、大学生(大学院生含む)5人、一般16人の合計34人。障害の有無については全盲5人(内2人は、肢体不自由等重複障害)、弱視2人。参加形態は親子参加3組、友人・知人・同僚参加2組。福祉関係者、大学等研究者、作家、ミュージアム関係者6人。藤下さんは白杖を持つ魔法使いさながらに参加者を触察世界へと誘い、アドリブ好きな広瀬さんは参加者と触察世界を大冒険。当事者であり触察のプロである二人のファシリテーターの空間認知力、記憶力、イメージネーション、そしてコミュニケーションや語彙の豊かさに参加者は触発され、触察世界を時に参加者同士で、時に個人で楽しんだ。子どもは

大人よりも触察力に優れている傾向にあった。また直感的に感じたことや気づいたことを素直に言葉にするので、既成概念にとらわれがちな大人の思考を刺激した。全盲の視覚障害者と晴眼者が、触察の仕方や触察から得られた気づきを気軽におしゃべりしながら楽しむ光景も見られた。「(触る)絵の鑑賞が楽しかったですね。いろいろな情景を思い浮かべながら、紙の隅々まで触ってみるのはなかなか楽しいです」と全盲の大人。「目で見ているようで実際にはそんなにみえていない(理解していない)。指先に集中して一生懸命イメージを頭の中で作ろうとしますが、うまくいかないですね。(ワークショップ後展示室で)改めて《ピエトロ・ミカの服装の男》を見ると顔の角度、帽子の飾り、服の襷、髭の様子等、普段何気なく見ていたところをよく見ることができたと思います。全ての作品を触るようにはいかならないと思いますが、自分の好きな作品はそういう見方ができるようになったらいいかなと思いました」と晴眼の大人。「今までにない感覚が広がっていくような気分になりました。まだまだ知らない、経験したことがない世界が身近なところにも無数にあり、そこにアクセスすることもユニバーサル・ミュージアムの重要な意義なのかなということも考えました」とミュージアム関係者。「作品の前に「自由に見てね」と言っても、一度見てしまったものの先入観を取り払うのはなかなか難しいようなのですが、触図となるともっと柔軟にならざるを得なくなるのかなと思います」と当館スタッフ。

「あえて晴眼者が触図に触る意味」を少しは見いだせただろうか。

\*1 岡山県立美術館ニュース122「鑑賞ツールとしての“触る絵画”—現状と今後—」

\*2 2019年3月23日(土)、24日(日)開催  
ファシリテーター: 広瀬浩二郎氏(国立民族学博物館准教授)、藤下直美氏(社会福祉法人名古屋ライトハウス)  
「触る絵画／アートゲーム編」制作: 小川真美子氏(点字・触図工房B)

\*3 松岡寿《ピエトロ・ミカの服装の男》、原田直次郎《風景》

\*4 チーム響き: 障害者が自由な選択をすることができる社会をめざすボランティア団体

## 新収蔵品紹介

### File 13

金重晃介「Boxシリーズ」  
福富 幸(主任学芸員)



《Box I》昭和50-51(1975-76)年頃 本館蔵

備前焼作家金重晃介(1943-)は近代備前を代表する人間国宝金重陶陽(1896-1967)の三男で、東京芸術大学・同大学院で彫刻を学びました。1975年から陶芸作品を発表し始め、東海大学講師を経て77年帰郷、今日まで備前で作品を作り続けています。

紐が掛けられた卵らしきものが入った箱、紐が掛けられ中身が分からないけど歪な形をした箱、紙に包まれ紐を掛けた箱—このBoxシリーズは東海大学時代の作品で瀬戸土を用い、白や黒、金やプラチナで着彩、焼き付けられています。前衛美術が全盛だった70年代を彷彿とさせる興味深い作品です。伝統的な茶陶のみならず、常に独創的な作品づくりを目指す氏の原点を見るようです。当館ではこの他、氏の代表作である《聖衣》に至る前段階を示す《櫛目菱壺》《菱壺》など合わせて8点の初期作を寄贈いただきました。



《Box II》昭和50-51(1975-76)年頃 本館蔵



《Box III》昭和50-51(1975-76)年頃 本館蔵

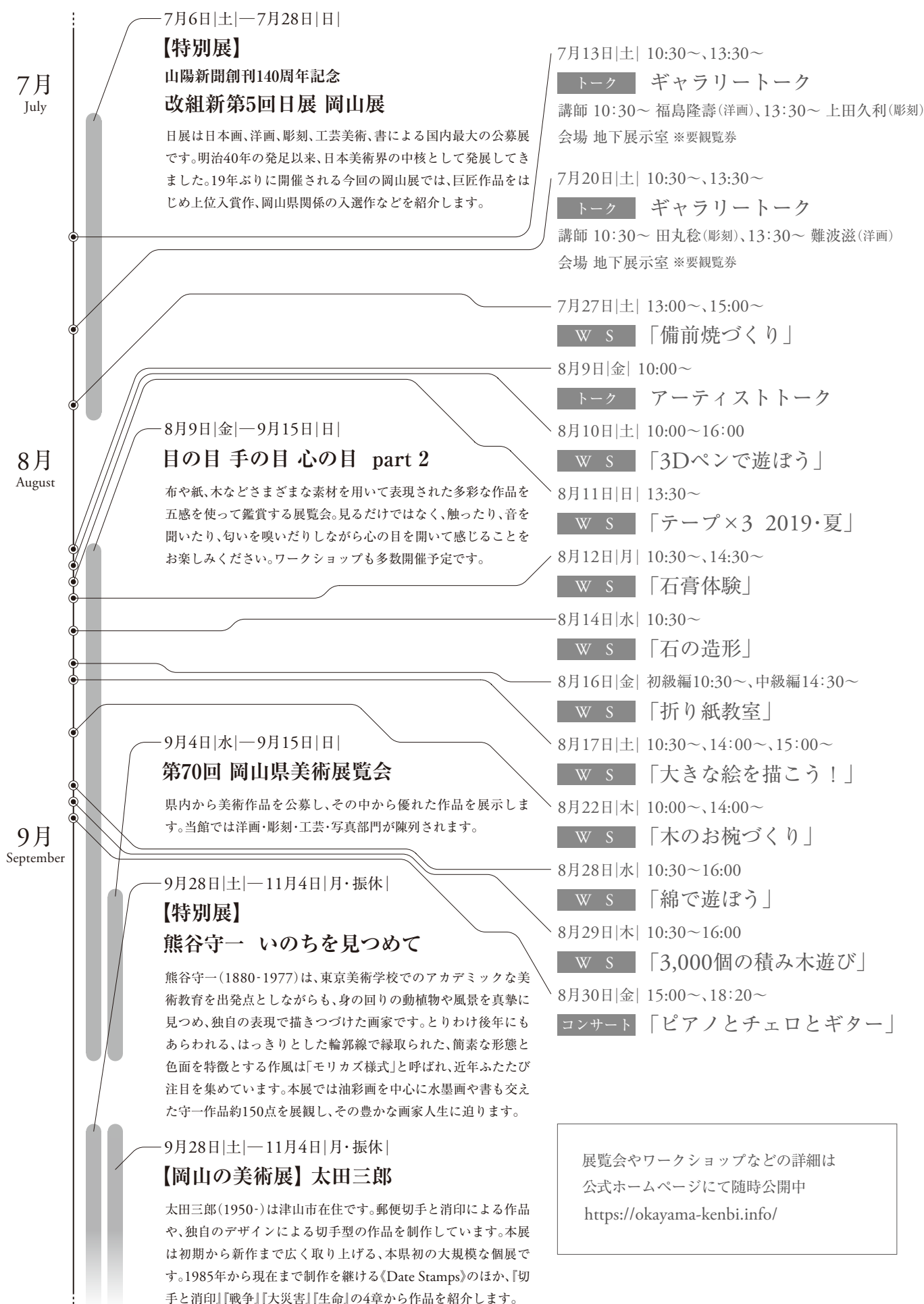
**【予告】夏休みはクールスポット美術館へGo!**

《目の目 手の目 心目の目 part2》8月9日(金)~9月15日(日)

2015年春休み、ご好評いただきました《目の目》展がこの夏、再びやってきます! 未就学児から大人まで、また視覚に障害がある方々にも目で見ただけでなく、手や耳や身体全体を使って美術を楽しんでいただく展覧会です。会期中にはさまざまな素材を体験できるワークショップを多数開催します。

作品展示協力作家: 檉尾聡美、島田清徳、戸矢崎満雄、藤本由起夫、南川茂樹、山本努、渡辺富夫

# 展覧会スケジュール



展覧会やワークショップなどの詳細は  
 公式ホームページにて随時公開中  
<https://okayama-kenbi.info/>

### 二つの対比

守安 収

4月21日に「江戸の奇跡、明治の輝き」展が終了し、4月27日からは平成最後で令和最初の「ロマンティック・ロシア」展が始まりました。短期間で作品の撤収、会場工作、展示をこなした館員をねぎらいたいです。そしてこれら二つの特別展には「随分とギャップがあって面白いですね」との評を来館者からいただきました。前者では日本絵画を稠密、濃厚に体験し、後者では描かれたロシアの人と風土を穏やかにゆったりと鑑賞します。フレキシブル(可変的)に多様な展覧会を催すという本館設立の主旨に沿った組み合わせです。▼過日、「植物の力 拡大する日本画 岩田壮平／浅見貴子」展(6月2日まで)をみようとして香川県立東山魁夷せとうち美術館を訪ねました。会場に入ってしばらくの間、息をのんで棒立ち状態。天井の高い真っ白な空間に、浅見さんの黒と白の画面が広がっていました。「裏側から描く」という水墨画、いや絵画史上、例のない表現を目指した試みが、ひとつの頂点に近づいたと思える作品群でした。2002年に開催した「墨戯」展に出品依頼して以来のファンである私は満ち足りた気分になりました。2階には岩田さん。鮮麗な彩色、写実を超えた感覚的・官能的な描写、夢幻の空間が連続するにもかかわらず、すっきりとした統一感が表出されています。ちなみに、会期後半は1、2階をチェンジし、作品も展示替えすること。▼二人は対照的な作風ですが、岩田さんは第6回、浅見さんは第7回の東山魁夷記念日経日本画大賞展大賞受賞者です。蛇足ながら、両者ともに受賞時に推薦した私はちょっぴり誇らしく館を後にしました。ますますの精進と活躍を期待しています。



岡山県立美術館  
OKAYAMA PREFECTURAL MUSEUM OF ART

〒700-0814 岡山市北区天神町8-48  
TEL 086-225-4800 FAX 086-224-0648  
Email kenbi@pref.okayama.lg.jp  
www.okayama-kenbi.info

交通案内 JR岡山駅後楽園口(東口)から  
・徒歩約15分  
・路面電車 東山行「城下」下車徒歩約3分  
・宇野バス 岡山後楽園バス「岡山県立美術館」下車すぐ  
・岡電バス 藤原団地行「天神町」下車すぐ  
開館時間 9:00—17:00 (入館は16:30まで)  
「美術の夕べ」実施日と夜間開館日は19:00まで(入館は18:30まで)  
休館日 月曜日(休日の場合その翌日)／年末年始／展示替え期間中

### 編集後記

三井麻央

昨年度おこなわれた「暗闇ワークショップ」では、視覚を用いずものと接するさまざまな方法を体験でき、驚きの連続でした。一般に美術館の展示物は視覚情報が優先する傾向にあります。制作のしかたも受容のしかたも、本当はもっといろいろですね。それに、単に「見る」といっても、水墨画を見る目、銅版画を見る目、3DCGを見る目は一あるいは立体物や形のないものを見る目も一すべて違うように思えます。この夏開催の「目の目 手の目 心の目」展では、そんな五感を刺激する作品たちを紹介します。老若男女、多くの人でにぎわう夏の美術館が今から楽しみです。